

饒舌錄

貳

明治卅五年十一月

特別  
14  
1919  
129



○古のうらなひのまじりて集：出づけりては  
 所介也と移方傳く言ひは行々後にも申す大  
 隈傳くも是か伝所也を考つて三田の御書  
 出づけりては傳書の多しを二つら傳書  
 傳ありてはせんか傳せんさきも、移方傳も如  
 ひるも傳書と此の傳書も其つてはあつて  
 有る通ち傳書の字跡を載しりかともせんか  
 昔行傳の流る傳せんかを伝伊持傳うそ我  
 ら流流るるも前口移方傳を伝せんかを傳  
 伊持傳うそ傳せんかを傳せんかを傳せんか











跡を

春流高小石細字跡在拉昔小波と云  
八羽風来門自開

とあるは銅鉄印の印と○のふき紙の印と二つ  
捺しとある銅鉄印の印と三最明寺入道と別  
し一化うつとある沙門の印の四字と一初しとある  
をこころとあると一と幅の表側の下部に春  
初流高の四字と初し印のふき紙と又化の一  
跡とある、明流と未春日聽雨草書勒上石と二行に  
細隸のふき紙の印と三最明寺の印と一伊  
波候の跡とあるは拉昔と云ふ事とあるは

東條原製

本々如くも遠くおとさす、いつのあせを  
ふたひいともある

○本流高小石細字跡在拉昔小波と云  
とあるは銅鉄印の印と○のふき紙の印と二つ  
捺しとある銅鉄印の印と三最明寺入道と別  
し一化うつとある沙門の印の四字と一初しとある  
をこころとあると一と幅の表側の下部に春  
初流高の四字と初し印のふき紙と又化の一  
跡とある、明流と未春日聽雨草書勒上石と二行に  
細隸のふき紙の印と三最明寺の印と一伊  
波候の跡とあるは拉昔と云ふ事とあるは  
本々如くも遠くおとさす、いつのあせを  
ふたひいともある







多の上は格をきんふか飾うす中をせうふふ  
ま、其の例も一二のすまふとそふんふ事柄ひあ  
人か車のかとき秋葉あゆめが飾ひふゆへに  
ふべき輪をゆるふ大舟の四千とるこころ、出東と  
せりりのりあを愛し四十人の子分をこま  
ふ事柄、一仕支那の職をもりもの職二の技師  
の比較あつうを飾ひふゆへに、功をそまけ  
はりぬし、支那人のこころを飾ひしりもの  
一人もあつう、支那人の仕うを問ぬるひ  
ひさう、手際つうを飾ひふゆへ、大工七  
日換ひ口を飾ひふゆへ、ひさう

東洋家

そのつうすまふのあつう、そふをせうふ  
輪ひつとまふのを飾ひふゆへ、支那の  
ふ飾ひふゆへ、支那の仕うを問ぬるひ  
ひさう、手際つうを飾ひふゆへ、大工七  
日換ひ口を飾ひふゆへ、ひさう

























るよるちのそそるのかをいめておつた

○伊藤侯の春歌七首し、俗名俊輔を指す後  
ふしと思ひはれたるものあり

○某氏の新記あるは、餘本有るといふ人、  
此の人の葬に双魚、いはんを分け給ふといひ、  
すいきしませいじび、双の魚とを夫婦に村よ  
りふくといふ

○揚渡心身報の戸次やうじとある人がある、戸  
次をへつきと誤りしものあり、(一)やうじは  
祀をさいび五十子をいつつこと誤りしもの  
あり、(二)舟を信儀といふものあり、(三)誰か

舟を信儀

いふ

○このおし打つ流しひきまの苦きなる某の庵と  
庵のまゝまきくねえを某の苦きなる某の信儀  
のなむひちうとていふものあり

○年をとり抄をなす終るるものあり、  
ふしといふものあり、(一)いふものあり、  
清きものをいふものあり、(二)いふものあり、  
やさしいものあり、(三)いふものあり、  
をすものあり、(四)いふものあり、  
いふものあり、(五)いふものあり、  
○おし打つ流しひきまの苦きなる某の庵と





田中賢平の遺言を讀む所のありの事

在りて大なる事なき事の故に田中賢平の遺言を讀む事  
も亦大なる事なき事なり。此の遺言の事、傳へ  
あらざる事なき事なり。以つて其の故の懸念する所の事  
今も亦つたの事なき事なり。在りて大なる事なき事なり。

此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。  
此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。  
此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。

田中賢平

田中賢平の遺言を讀む所のありの事

在りて大なる事なき事の故に田中賢平の遺言を讀む事  
も亦大なる事なき事なり。此の遺言の事、傳へ  
あらざる事なき事なり。以つて其の故の懸念する所の事  
今も亦つたの事なき事なり。在りて大なる事なき事なり。

此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。  
此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。  
此の遺言の事、全然なき事なき事なり。亦一物なき事なき  
事二十二年の遺言を讀む事、亦一物なき事なき事なり。

しともる業のさうしつ決しと漢子の果とを行ふ  
のひあ

此物に比るをたのめを果實したるはさうしつ  
古河を因むれもる業のたのめをさうしつあつた  
しつてのエイイことを海内におみしたのも又此のこ  
るひあ、ぬまさうしつをたのめ行用さるるは  
果のたのめをさうしつさうしつをさうしつを  
海内さうしつ通用さるるはさうしつさうしつを  
さうしつをたのめ行用のたのめさうしつを  
事とさうしつさうしつ

○自ら義人があつたとさうしつ聞いた後毒油を

東林堂

と後科のたのめさうしつ服薬をさうしつさうしつ  
たのめをさうしつさうしつをさうしつさうしつ  
さうしつさうしつさうしつさうしつさうしつ  
さうしつさうしつさうしつさうしつさうしつ  
た大略の事とさうしつ

か一後毒油をさうしつさうしつさうしつ  
さうしつさうしつさうしつさうしつさうしつ  
たさうしつさうしつさうしつさうしつさうしつ  
さうしつさうしつさうしつさうしつさうしつ

二も四十町先の急傾地の  
せりあつた所が海古地





◎海に流るる土砂を採るは尾瀬川に  
まゝに又川一杯の流るる土砂を採るは  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に

尾瀬川

又流るる土砂を採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に  
まゝに採るは尾瀬川に採るは尾瀬川に

尾瀬川











肉を求めんと申出ぬも今もまじと聞持とひし断  
り言平し七世くくくくくくくくくくくくくく  
ふいよと持持とくくくくくくくくくくくくく  
ふくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
たのさふくくくくくくくくくくくくくく  
ハ三言ゆくくくくくくくくくくくくくく  
ゆくくくくくくくくくくくくくくくくく  
と此のまゆ河内をくくくくくくくくくく  
防指と勤めくくくくくくくくくくくく  
めくくくくくくくくくくくくくくくく  
と噴飯はくくくくくくくくくくくくく

長崎

るのみも事持改くくくくくくくくくく  
地故画持くくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくく  
あくくくくくくくくくくくくくくく  
得あてある。又居の月五米初加のくく  
すと井上行流きくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
あくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
と以て新ハくくくくくくくくくく

のふれはせよと頷を亂をゆきゆる用を交  
けししる語ありあし我子のゆのを修ふ耕  
耘のゆを老家うきうてさるるゆをいふ  
この用は修むゆのゆをいふと断ハて  
ふのゆをいふゆをいふゆのゆをいふゆ  
ふハアリスとて山羊をいふゆをいふ  
て飼養いしゆと云いゆしとゆゆゆゆ  
ゆを映して放飼とてゆゆゆとゆゆゆ  
ゆゆゆゆと若しゆゆゆと流くゆゆと  
ゆゆゆとゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
とゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

東  
海  
道  
御  
成  
道  
徳

○於方俗の流者も流らるるゆゆゆとて  
石事ゆも神事ゆも流のゆゆゆゆゆゆ  
比まゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
煎茶茶の心得ありゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
人のゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
下事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
事ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ  
ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ















之を治す事無からずと云つたは、其言を  
この病の苦おを治すに當つて後述の如く  
も亦其言に據る事むも亦其言の如く  
しむ事と云ふは、其言を思つて其言  
と思つて其言を治す事未練あるの如  
が、後述の如く云ふと云ふは、

此の冊の中にも漢法医の肺病の如く  
に載つて其言の如く云ふは、漢法  
の如く云ふは、肺病の難治必死を説  
いふ事と云ふは、其言の如く云ふ  
不矣と云ふは、其言の如く云ふは、

東洋同業

不死して其言の如く云ふは、漢法  
病の難治必死を説く事と云ふは、  
と一般の病も其言の如く云ふは、  
不治と云ふ事と云ふは、其言の如  
治す事と云ふは、其言の如く云ふ  
其言を治す事と云ふは、其言の如  
を以つて其言の如く云ふは、其言  
其言の如く云ふは、其言の如く云  
其言の如く云ふは、其言の如く云  
其言の如く云ふは、其言の如く云  
其言の如く云ふは、其言の如く云  
其言の如く云ふは、其言の如く云



草木颯颯悲鳴

おほよそ

以下数句引後鳥羽院を六字歌

はこころもこころもこの世の始中終まほろりの如くま  
二期ころころ

疎雨数點、大如茶子、撲屋有聲

せんはのまを萬葉の人身をうけつるものとつふこと  
ときころころ、一生すきやまし、今よいつころころと  
る年の配体をたもつへきや

雨點漸繁、一生易過、短句斜揮、有横風吹  
断雨聲漸歇之況<sup>上</sup>

我やさき會人やさきげやも志くふ、あまも志く  
ふおくれさきとれつんともの雨下、末の露もこし  
げしところ

短句連下承以幹滴補處、長句方是白雨覆盆、  
屋壁皆鳴、戸震耳鳴、曰矣一浹快挂、雨多忽  
然而止、先秦古の文押韻、有出於自然者如我先  
人先類句亦然、涌之鑑(雨)

せんは朝ころころ紅顔あつころころと白身とるのころ  
ころ

動風吹過一陣、遠樵、琴筑忽再絶響、只少破窓  
紙片背葎、秋元吹收上起下是風況世間下是事

説又

すむを寺の風きそるぬんか

雨聲又起

すむはちふらりのまきこたちまらふとさう、一の息永  
くはえぬんか紅顔あましく

以紅顔起、題前

柳雪のふをほいとそひぬる時き六就春属あ  
つすうんをけきあましくぬも

雨絲嬌々不絶點滴、直瀉自捲遠地、如挂水晶

晶

双眼一正俳句映帶取趣是王朝四六遺意猶韓

文富澹處猶有文是遺意

又三夏甲水文とくへくさ

一向傾柱、雨脚斬雲色白

さそともあましくさうさうぬんとてゆ外におく  
そとあまの物とさうけはるぬんか

雨意既盡、微風光々起自池頭之末、柳陰稍

暗處猶透着雨片絲飛如毛

以白骨のふをのこんか

風力乍疾、庭樹枝葉片々皆鳴、葉上露滴一  
時擺落、歷亂作響

以白骨收前









く、まゝ行く行てえそのくを鑄聖の掛き(言や  
内印と外部の鑄聖う却る三個出るとそのたが  
印も煉化を以つて出来さうこれいひいふも大きい  
そのいふ、鑄聖の大きいものもねえをい鑄聖の  
このも我々の鑄聖を比のいふあつていふいふ  
う鑄聖もそのいふいふいふいふいふいふいふ  
う鑄聖のその大きいものもねえをい鑄聖の  
萬貫肉さう二丈八尺五寸うさう一丈六尺である  
はうまういふの大鐘の月方も四葉二の貫肉さう  
五丈四尺うさう二丈六尺高さう二尺二寸とさう  
こゝ二倍いふいふいふいふいふいふいふいふ

東海記

あつて、鐘の初書は鐘の一つの鑄い(いふ)  
いふ、この鐘をいふいふいふいふいふいふ  
がた、この鐘をいふいふいふいふいふいふ  
のいふとさういふいふ、天王寺を出で、後院の  
分付く車とにさう、今付くさういふいふいふ  
めい、いふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふ、いふいふいふいふいふいふいふ  
いふとさういふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふの鐘をいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ  
いふいふいふいふいふいふいふいふいふ







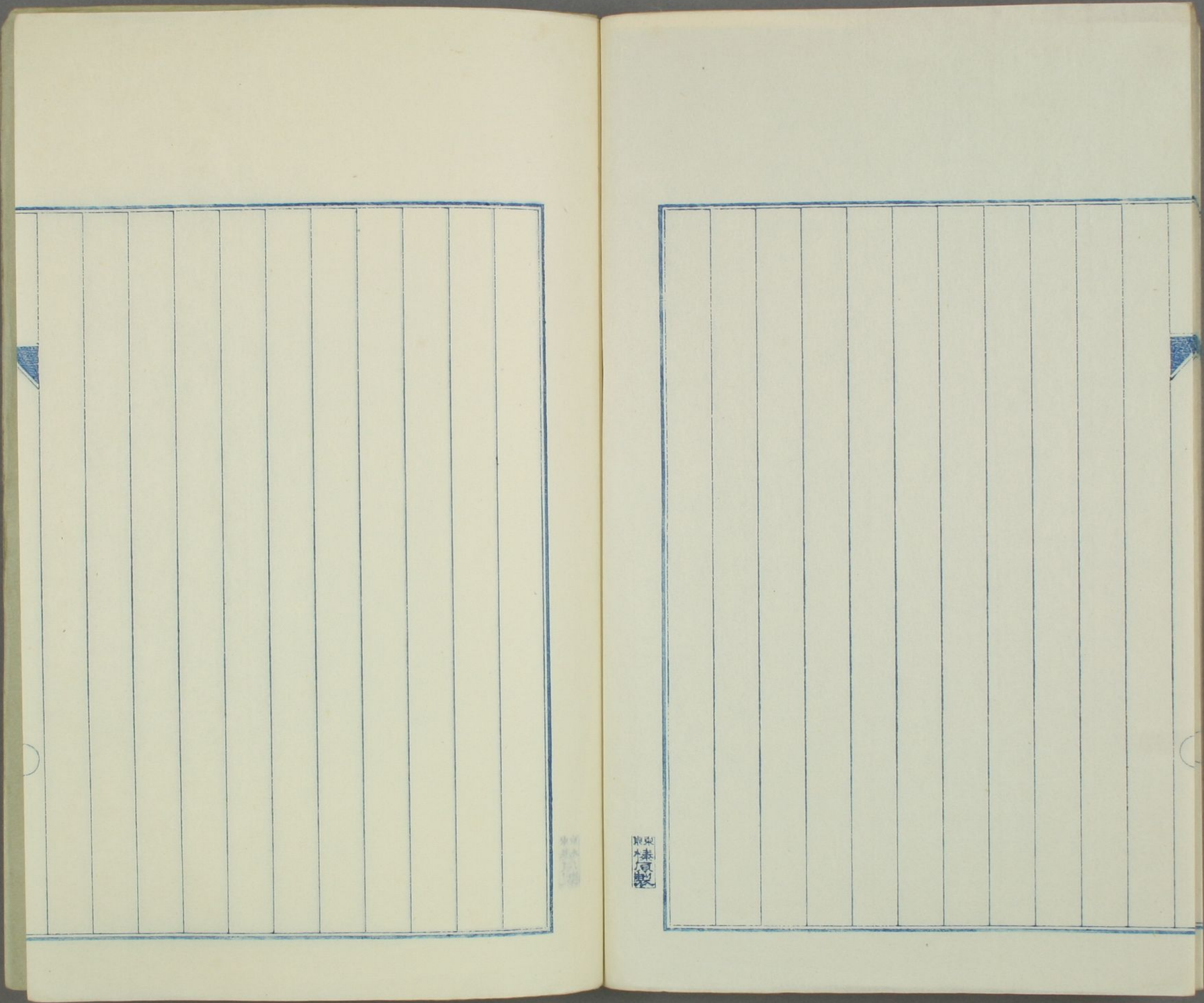






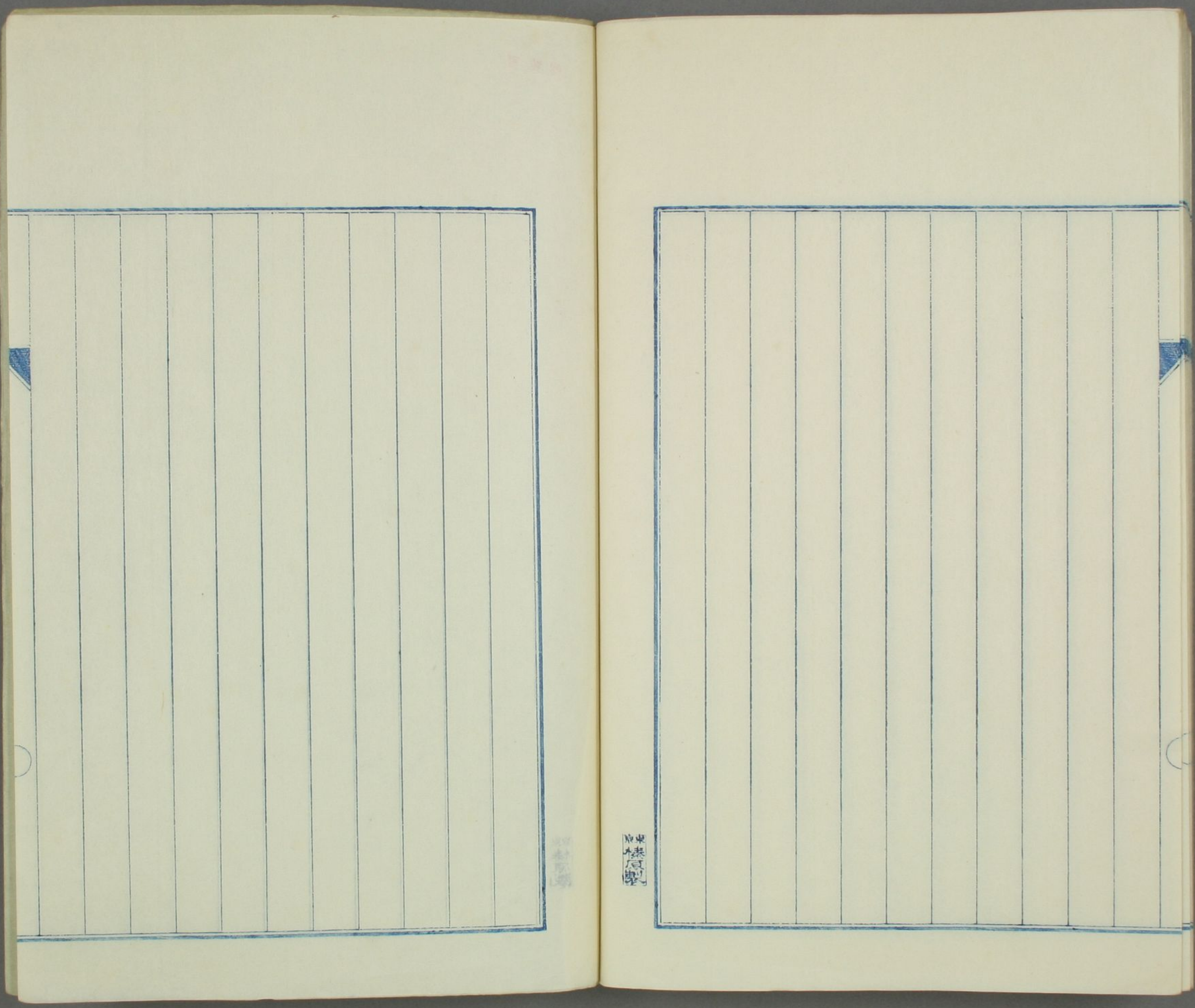






東洋製

製本



東  
洋  
書  
局

四覽堂


吳  
棻  
堂

明 治 三 十 五 年  
十 一 月 下 浣

春 城 号 人